

本資料の利用について

教育・研修を目的とした利用に限ります。資料としてご利用を希望する場合は、コンテンツの出典として「利用する資料等の作成者・執筆者」「利用する資料等が作成・公開された事業名」「コンテンツが示されているウェブサイトのURL」を明記して利用してください。部分的な切り取りや加工をして利用することは禁じます。

東京学芸大学 先端教育人材育成推進機構 外国人児童生徒教育推進ユニット 2025年度 シンポジウム
外国人児童生徒等教育を担う教育者・支援者の育成 -『多様性の包摂』の実現に向けて-
2026年1月31日 13:00-17:00

実践交流会 「多様性が生きることばの教育実践2025」 私の実践を語り・子どもの姿に学ぶ 報告

河野俊之（横浜国立大学）

原瑞穂（東京学芸大学）

齋藤ひろみ（東京学芸大学）

- 東京 10月4日(土) 13:00~16:30 東京学芸大学
- 名古屋 10月19日(日) 13:00~16:30 南山大学
- 神戸 11月1日(土) 13:00~16:30 のじぎく会館

実践交流会の趣旨

日本語教育・支援に関わっている教員・支援員・支援者の皆さんが、相互に実践を語り合い・学び合う場を設けることにしました。子どもたちも多様であれば、教育・支援の現場も多様です。教育・支援に携わる皆さんは、この多様性を活かして子どもがことばを豊かに働かせる力を高めるために、教育・支援活動で創意工夫をなさっています。実践交流会では、参加される皆さんにご自身の実践について語り合ってください。授業のプランや教材、子どもの成果物など、実践の実際がわかる資料をもとに、子どもたちが何を学んだのかを検討するとともに、子どもの姿から明日の教育実践について学びたいと思います。その対話のプロセスで、子ども観、学習観、言語観が交差し、きっと創発が得られ、次なるアイデアが飛び出します。ぜひご参加ください。

実践交流会の趣旨（抜粋）

授業のプランや教材、子どもの成果物など、実践の実際がわかる資料をもとに、子どもたちが何を学んだのかを検討するとともに、子どもの姿から明日の教育実践について学びたいと思います。その対話のプロセスで、子ども観、学習観、言語観が交差し、きっと創発が得られ、次なるアイデアが飛び出します。

実践交流会の構成

- 実践事例紹介 or ミニワークショップ(80分)
- 実践の交流(90分)
 - 45分間のセッション×2回
 - 一人15分ずつの紹介・質疑応答
- 振り返り(30分)

実践の経験から学ぶ

学びの出発点：経験

- ・自身の観察
- ・状況への参加の方法
- ・体系的に思考

⇒ **ALACTモデル**

既にある枠組みを用いながら
経験から学んでいる
・・・自覚化も必要

行為の選択肢の
拡大 (Creating
alternative
methods of
action)

経験による学びの
プロセス (循環型)
ALACTモデル
(コルトハーヘン)

本質的^な諸相への
気づき
(Awareness of
essential
aspects)

試み
(Trial) → 行為
(Action)

行為の
振り返り
(Looking back on
the action)

第1回 (10/4 東京:22名)

13:00 開会・趣旨説明

13:10 実践事例紹介

小学校「JSLカリキュラム」の事例

田中寛子 (目黒区立東根小学校)

中学校「道徳科」の事例

青山岳史 (可児市立蘇南中学校)

14:30 実践交流

45分間のセッション×2回

一人15分ずつの紹介・意見交換

16:00 振り返り

「実践を語ることで見えること・子どもの姿から学んだこと」

原瑞穂 (東京学芸大学)、河野俊之 (横浜国立大学)

齋藤ひろみ (東京学芸大学)

16:30 閉会



実践事例紹介

第2回 (10/19 名古屋:18名)

13:00 開会・趣旨説明

13:10 実践事例紹介

こども園「文字指導」の事例

井村美穂・森井えみ (子どもの国)

中学校「JSLカリキュラム」の事例

中村夏帆 (愛知県岩倉市立南部中学校)

14:30 実践交流

45分間のセッション×2回

一人15分ずつの紹介・意見交換

16:00 振り返り

「実践を語ることで見えること・子どもの姿から学んだこと」

河野俊之 (横浜国立大学)、川口直巳 (愛知教育大学)

上田崇仁 (南山大学)

16:30 閉会



実践交流

第3回 (11/1 神戸:15名)

13:00 開会・趣旨説明

13:10 ミニワークショップ

「内容と日本語の統合学習のデザイン

—『JSLカリキュラム』の実践例から—

齋藤ひろみ (東京学芸大学)

14:30 実践の交流

45分間のセッション×2回

前半:一人15分ずつの紹介・意見交換

後半:ブースセッション (移動自由)

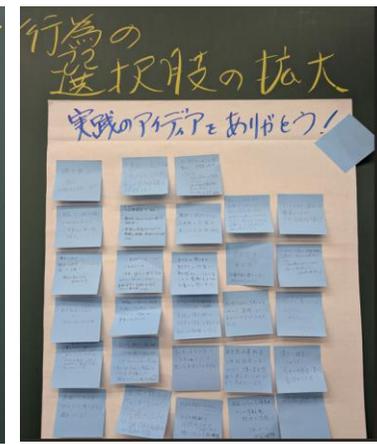
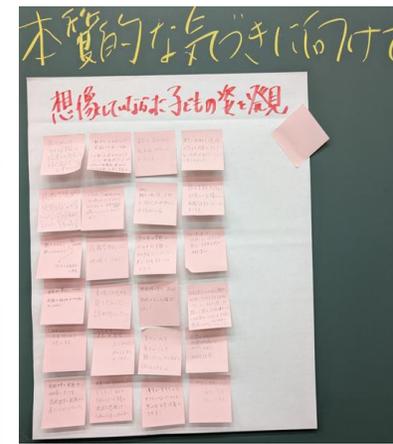
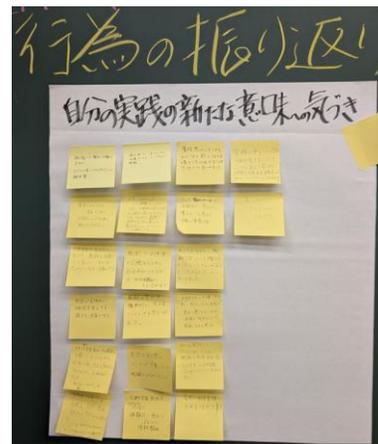
16:00 振り返り

「実践を語ることで見えること・子どもの姿から学んだこと」

齋藤ひろみ (東京学芸大学)、村松好子 (梅花女子大学)

浜田麻里 (京都教育大学)

16:30 閉会



振り返り (ALACTモデルの観点で)

実践交流：事例紹介（グループで）

お一人の持ち時間 15分間

実践の紹介(5分)

1)取組(実践)の前の問題意識

子どもたち、あるいは教室の実態と設定した課題

2)取り組みの工夫

課題を解決するために具体的にはどのような工夫をしたか

3)結果

一定期間実施してみた結果、どうであったか

話し合い(10分) ★質問・コメントはこちらで

16:00～全体で振り返り

話し合いを通して気づいたこと

調整・修正しよう、新たにチャレンジしようと思ったこと



実践交流

タイムテーブル

セッション1 14:45-15:30

実践内容に共通点がある、校種異

セッション2 15:30-16:15

実践内容・関わり方が異なる、校種同

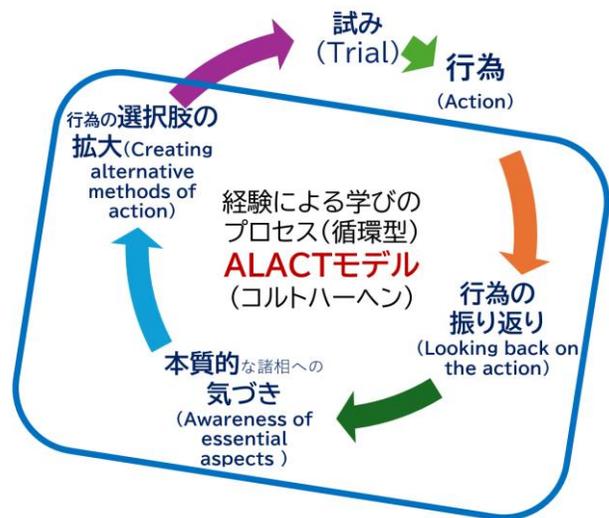
経験からの学びの条件

= 実践交流への参加姿勢

- ① 安心して学べる
(共感的に実践紹介を聞く)
- ② 挑戦に積極的になれる
(「プラス面」を積極的にコメント)

⇒ 参加者主体のプロセス

参加者の声 (学び)



自他の実践・視点の交差により、視点の広がりや深まり、今後の方向性が生まれている

- 事例報告では、先生方の実際の授業の進め方、留意点など具体的なお話を伺い大変参考になりました。特に印象に残ったことは、オノマトペ指導で用いられたはてなボックスとわたしの物語で作文を発表する取り組みです。いずれも近い取り組みをしたことがありましたが、自分の取り組みがいかに中途半端であったかがわかりました。定着を促し、次に繋げるための工夫をたくさん教えていただきました。交流では取り組みの様子を伺えたことや悩みを共有できたことが大きな収穫でした。
- 交流の時間では、共通点のあるグループや同じ校種のグループの中で、自分の実践に対する建設的な意見をもらうことができました。日頃は、「これでいいのだろうか」と不安を抱きながら実践していることが多いのですが、「大丈夫」と背中を押してもらえるような勇気もらうことができました。また、立場や環境は違っても、子どもたちのために何ができるかを考えているという共通点を持った方々の実践を知ることができ、大きな刺激を受けました。表現したものを掲示したり、お互いに見せ合ったりすることで、発表する側にも見る側にも新たな学びや気づきがあることに改めて気づきました。今後の実践の中でも、こうした「他者に関く」取り組みをぜひ取り入れてみたいと思います。
- 実践を話すことで、「自分が担当する生徒の良さ」に気づかせてもらった。うるさいほど自分の意見を話せるってすばらしい。
- 国語科の学習で戦争を扱う単元をあえて軽く扱ってきた気がする(難しいとか、きっとわからないだろうという気持ちがあつて)。逃げてはいけないと反省。
- JSLカリキュラムの指導案の立て方について理解が深まりました。交流を通じて、自分に足りないものは教科につなげる日本語指導だと思いました。子どもたちとの関わりの中で教科につなげられる場面を見逃さず、適切なタイミングで日本語を教科学習につなげられるよう今後は意識したいと思いました。
- 昨年行った実践を発表しましたが、振り返りを通して、再度自分の実践について考えるいい機会になりました。実践をしたことに満足してしまい、この実践で培ったことをその後にかすことができていなかったことを改めて認識しました。

参加者の声 (要望)

- 参加のハードルを下げる

所属も立場も不安定な支援員の方たちは、このような会に参加することに躊躇してしまうと思うので、参加の心理的ハードルを下げてくださいとありがたいです。取り組みを発表する、と書いてある時点でパワーポでバッチリ発表しなければいけないんだらうな、取り出しで個人的にやっているから発表は無理かな、と思いましたし、その後の連絡でそこまでなくていいと書いてあったものの、皆さんバッチリ準備されていました。

- 意見交換の時間を確保する

皆さん、話すことが好きなので、ほぼ発表で終わったケースが多く、質問などをする時間が限られてしまいました。参加募集の時点で発表の時間配分と形式を示しておく良かったのかも。

- より多くの実践に触れる

他の発表も聞きたかったので、前後半のグループワークの後、各グループでよかった内容や要約の発表をして欲しかったです。

今後に向けて

- 交流後に改めて実践を振り返る

再び自身の実践に向き合い、行為の振り返り、本質的な諸相への気づき、行為の選択肢の拡大について整理し、次へとつなげる。

- 実践から学ぶことの意味の捉え直す

実践交流を「成果の発表」から「プロセスの共有」へと捉え直す。
企画・運営者にも参加者にも求められる。